

エビデンス再考

量的研究と質的研究

高木廣文・林 邦彦

エビデンス再考

量的研究と質的研究

高木廣文 TAKAGI Hirofumi
新潟大学医学部保健学科

林 邦彦 HAYASHI Kunihiro
群馬大学医学部保健学科

はじめに

本連載も今回で最終回となった。4年間にわたる連載となったのだが、看護研究とEBNの関係は、どのように変化したのだろうか。筆者らの調査結果は、EBNの認識は確実に日本の看護教育者・研究者の間で広がっていることを示している¹⁾。

本連載の最終回として、再度、「エビデンス」ということについて考えてみたい。特に、看護研究でよく用いられている質的研究のエビデンスについて考えてみることは、今後の看護研究やエビデンスを用いた看護実践を行うためには有用であろう。

量的研究と質的研究

人間を対象とする研究では、その扱うデータの質によって、量的研究と質的研究に大きく2つに分類することができる。

工学や物理学などの自然科学に属する分野では、客観的な測定に基づいた量的データを用いて、一般的な理論を発展させる量的研究が普通であろう。一方、心理学や社会学のように、人間にかかわる事象を扱うため、必ずしも適当な「物差し」を用いた客観的な測定ができるとはかぎらないため、言語情報を基本データとした、いわゆる質的研究も多い。

医学分野では、各種の生理学的検査値のように、

量的に把握されたデータをもとにした研究が主流だが、人間の心理を重視する看護研究では、質的研究の重要性が指摘されている¹⁾。しかし、看護学の研究対象となる多くの現象は、看護師と患者の相互作用やケア、患者の意識など個性が強い。そのため、AHCPR (Agency for Health Care Policy and Research；米国医療政策研究局) がエビデンス水準の高い研究としている無作為化比較試験のような、実験的な看護研究を行うのは難しい²⁾。

今回は、看護研究で重要と考えられる質的研究について、エビデンスという視点から、量的研究との比較を通じて考えてみたい (①)。

エビデンス水準を決めるもの

エビデンスを、ある研究の科学的な証拠としての価値と考えた場合、エビデンスの良否や高低はどのように決まっているのだろうか。

EBMやEBNの枠組みで、エビデンス水準の高い研究とされるのは、研究対象が無作為に選ばれた場合か、ある処理を研究対象者に無作為に割り付けた場合である。したがって、データ解析に多変量解析の高度な方法を使用しているからエビデンスがあるとか、2群の母平均値の差の検定 (t 検定) しか行っていないからエビデンスが低い、といったことではない。すなわち、エビデンス水準の高低は、研究の



	量的研究	質的研究
研究対象	数量化もしくはコード化可能なあらゆる現象。	言語化可能なあらゆる現象。
研究目的	確証的研究：研究仮説の検証，推定，観察事象の一般化。 探索的研究：現象の記述，問題の探索，モデル構築。	現象の記述，再構築，行為の意味の解釈，理解，モデル構築。 その他，研究課題に依存。
データ収集法	実験，調査，観察。 質問紙調査が多用される。	調査と観察が基本だが，実験的研究でもよい。 半構造化面接が多用される。
研究対象者数	一般化のためには多いほどよい。	1例以上。
研究対象の選択	確証的研究：無作為抽出，比較的研究では無作為割り付けが望ましい。 探索的研究：無作為抽出が好ましいが，任意抽出も多い。	任意抽出が普通。 データ解釈の進展に応じて，理論的サンプリングを行うこともある。
解析／解釈用のデータ	特定事象について，コード化，カテゴリ化されたものの，文字でもよいが，一般には数値。	絵，写真など，何でもよいが，最終的には，言語化されたテキスト。
データ解析／解釈の方法	統計学の各手法。特に検定，推定の各種法が中心だが，複雑な現象記述のためには多変量解析も有用。	おもにコード化，カテゴリ化，中核概念の抽出など。 研究課題に応じた解釈法を採用。
データ解析／解釈のツール	おもにコンピュータで解析用ソフトを使用。	おもに研究者自身の頭脳。
結果の解釈	確証的研究：統計学的検定の有意性などをもとに言語化して解釈。 探索的研究：ある程度のアブダクション（発想法）が必要。	データ解釈時に行う。 アブダクションが必要。
エビデンスの水準	標本抽出または処理の割り付けの無作為化の程度に依存する。	研究の信憑性を高めるようなプロセスの存在の程度に依存する。 トライアングレーションの実施の有無とその内容にもよる（今後の検討が必要）。

① 量的研究と質的研究の比較

ための標本抽出や割り付け法をどのようにするかで決まってくるのである。この点に関しては，すでに本連載第8回の正しい因果推論についてのカウンター・ファクチャル・モデルの説明で，なぜ無作為化が必要なのかを解説した³⁾。カウンター・ファクチャル・モデルでは，1例でも因果推論が行えるので（実際は2人だが），理論上は量的研究でも質的研究でも，少数例で最高のエビデンスをもたらすことができるはずである。実際には，カウンター・ファクチャル・モデルは研究に使えないので，無作為抽出や無作為割り付けによる研究計画を考えるのである。

データ解析として統計学の各種手法を用いるのは，

推定や検定のためである。この前提が無作為抽出／無作為割り付けという標本抽出法である。この条件が満たされていないければ，データ解析の結果は意味を失ってしまう。そのため，量的研究の多くはこのような手順をとっている。

一方で，質的研究は様々な方法論を含んでおり，一般化して解説するのが極めて困難であるとされている⁴⁾。しかし，質的研究では任意の1例から研究を開始できるし⁵⁾，データ解釈やモデル化の進展にしたがって，理論的サンプリングを行い，必要な情報を収集するという手順をとる^{4,6,7)}。

このように，質的研究では研究の一般化を必ずし

も目指さないために、標本抽出は任意で構わない。したがって、臨床的な無作為化比較試験を最高のエビデンスとするEBMやEBNの基準から判断すると、質的研究のエビデンス水準はかなり低いことになる。

しかし、これは妥当な判断だろうか。Willigが指摘しているように⁹⁾、ケーススタディであっても、よいエビデンスを与えることはあり得る。たとえば、離婚した夫婦のどちらに子どもを養育させるべきかという問題で、「夫よりも妻のほうが子どもにとってより好ましい」という意見が大勢を占めていたとしよう。このような場合に、母親による児童虐待の例が1例でもあれば、そのような意見が必ずしも正しくないという反証となる。反証は1例で十分であり、エビデンスとして完全である。

このように、質的研究であっても、場合によってはエビデンス水準が高くなり得るのである。

量的研究と質的研究の考え方

以下に、量的研究と質的研究の簡単な比較を行い、科学的な証拠としてのエビデンスについて考えてみたい。

◆量的研究の考え方について

量的研究は、科学的で客観的な研究方法と考えられている。このことは、データの解析方法として統計学を用いることと切り離しては考えにくい。林は、「現象解析の方法としての統計学」として、現象解析に直結した統計学という概念を述べている⁸⁾。また、Raoは⁹⁾、推論の論理形式として、①帰納法（観測データに基づく新しい知識の創造）、②アブダクション（データに基づくことのない、直観による新しい知識の創造）、および③演繹法（提案された定理の証明）、に3分類している。これによれば、統計学とは、偶然についての知識（演繹的）を用いて、不確実な（データからの帰納的な）知識から、利用できる知識を

得るための方法ということになるだろう。

量的研究では、標本という少数の調査データから、もともとなる母集団についてのより一般的・普遍的な傾向性を科学的に明らかにしようとすることが多い。このような統計学的手法を駆使して研究を行う「確証的解析」に基づく研究が主流ではある。しかし、確証的研究では、新たな理論構築は不可能であるという反省から、データに基づいてデータの語るところを明らかにしようとする「探索的データ解析」を標榜する流れも存在している^{10,11)}。

統計学を用いる量的研究の目的は、ある事象について、①その現象の記述、②一般化・普遍化さらには理論化、の2通りに考えることができるだろう。たとえば、内閣支持率はどのくらいか、新しく開発した薬剤による血糖コントロールは現在の標準薬よりも良好なのか、などの疑問に答えるためだろう。

現在では、コンピュータの発展と統計学ソフトの普及とともに、各種の多変量解析の手法が、理論的理解なしに簡単に利用できるようになってきた。このため、非常に多数の変数を一度に処理することで、極めて複雑な現象の記述と理論化が、ある程度は可能になってきたのではないかと考えられる。潜在的な因子構造の探索と検証、リスク因子の探索と検証、また特定の現象のモデル化と検証などを行うことも、ある程度は可能になってきている^{12,13)}。この点から、従来までいわれていたような質的研究でなければ扱えない領域も、量的研究である程度は扱えるようになってきているとも考えられる⁴⁾。

もちろん、多くの無作為化臨床試験のように、単純な仮説検証のみを目的とする研究も多いが、記述的・探索的・確定的な検証というように、量的研究といっても、その扱う現象は極めて多様になってきたといえよう。

◆質的研究の考え方について

量的研究が具体的な事象を操作的に把握するのに

対して、多くの質的研究では、「人間をトータルにそのまま理解し把握しようと試みる」ため、科学性、客観性などの認識に関しては、質的研究者のなかでも大きな差があるようである⁴⁾。

Willigは⁵⁾、心理学での質的研究における認識論の重要性を述べ、実証主義の世界観（世界のすべての事象に対する知覚や理解の間に対応関係があり理解可能とする）は批判されており、経験論もその限界が指摘されていると述べている。一方、Popperは、帰納主義を批判し、仮説演繹主義を定式化し、理論を反証することによって真理に近づき得るとしたが、Popperの仮説演繹法は、新たな理論構築やパラダイムの転換をもたらさないことから、1960年代から1970年代に強く批判された⁵⁾。

現象学的社会学の一つの立場である社会構成主義が、近年では重要視されてきている。社会構成主義は、一見、確固とした実在のように当事者に思われている事象を、社会的に形成されたものとしてとらえ、その過程を分析するという立場である¹⁴⁾。

このように、質的研究といっても、対象に対する認識は多様である。しかし、その共通する点として、質的研究者は「意味に対する関心をもつ」傾向があるといわれている⁵⁾。量的研究でのように、因果関係の同定よりも、経験の質や経験同士の相互関係に関心をもつ傾向がある。また、量的研究とは異なり、研究のために特定の変数を研究開始時に設定することはない。

反省（内省ともよばれる）は、エスノメソドロジでは重要な概念である¹⁵⁾。この反省に関して、Willigは⁵⁾、質的研究の枠組みで個人的反省と認識論的反省に分類している。個人的反省とは、価値、経験、信念、社会的同一性などが、研究途上でどのように影響したかを考えることである。一方、認識論的反省は、研究プロセスでの各過程、すなわちサーチ・クエスチョンはどのように「発見」されたのか、データや知見をどのように「構成した」のか、

異なる方法を用いた場合、現象の理解にどのような相違があったのか、などを検討することである。ただし、このような反省を質的研究のなかでどの程度行うかは、研究者による個人差が大きい点も指摘しており、研究の質にも影響を与えるものである。

また、質的研究とは、統計的な処理や数量化のためのほかの手段によっては到達し得ない結果をもたらすような研究をすべて含むという考え方がある⁷⁾。そして、質的研究では、特定の個人の認識、態度、行為などの社会的な相互作用を問題にし、理論の探求や意味の探求を行うのが普通である^{5,7)}。

特定の理論の構築を目指さずに、関心のある現象の記述のみを行うことを目的とする立場もあるし、理論構築を目指す場合であっても、現象の一般的理論（公式理論）を目指すのは、単独の研究だけではかなり困難なので、通常は、特定条件化で有効な具体的理論を構築することを目的とするのが普通であろう^{6,7)}。このように、特定の現象の記述から、一般理論の構築まで、質的研究の目的はかなり広範に及んでいる。

研究事象のデータの測定方法

量的か質的かという呼称は、その扱うデータの「質」に依存している。林が指摘しているように¹⁶⁾、もともとデータは操作的な測定によって得られるものであり、大きく二分して考えることができる。それらは、①物理的・化学的に測定可能な事象のデータ（たとえば、身長、体重、各種生理学的な検査値）と、②本来は測定が不可能な事象のデータ（たとえば「不安」）、である。

①の場合は、研究対象となっている事象を、我々は測定誤差の範囲内で、数値として「正しく」測ることができるものと考えている。また、性や血液型のように、特定のコード化やカテゴリ化が可能なも

もある。このように、数値化やコード化されたデータを用いることが、量的研究での信頼性や客観性の基本となるものと考えられる。

一方、②の場合、測定はそれほど客観的とはいえず、極めて操作的に測定するものである。すなわち、事象に潜在的な構造が存在するものと仮定し、その潜在構造を表明すると考えられる複数の質問への対象者の回答により、その事象を把握しようとする。このような測定には、仮にデータが量的に収集されたとしても、妥当性、有効性、信頼性などの問題が常につきまとうことになる^{8,16)}。

このように、量的研究においては、調査に先立って特定の事象の把握の方法、すなわち測定方法を設定するのが普通である。しかし、質問への回答を限定できない場合や、より自由度の大きい回答を得たい場合には、質問への回答を対象者に自由に記載させ、調査後、回答を見て、研究者がカテゴリ化を行う場合もある。どちらにしろ、データとして使用するためには、コード化が不可欠である。

質的研究の調査方法として、南風原らは、①観察、②面接、③フィールドワーク、に大別している¹⁷⁾。観察といっても、自然的観察と実験的観察に分けて考えることもできるなど、個々の分類はさらに細分して考えることもできる。Flick も、観察、インタビュー、フィールドへの参入などについて、データの収集法として詳細に記載している¹⁴⁾。一方、Willig は、面接と観察を中心に解説している⁹⁾。いずれにしろ、質的研究では、自然科学的な動物実験をデータ収集のために用いることはない。しかし、看護では介入が基本であるため、実験的な調査研究もあり得るだろう。

質的研究においては、研究目的にもよるが、ほとんどあらゆるものがデータになり得るし、写真、絵、映画などでもよいとされる¹⁴⁾。しかし、最終的にはデータは、言語情報として収集される。

質的研究では、解析／解釈すべきデータとして、

言語がそのまま用いられる点が、量的研究とは大きく異なっている。ただし、量的研究でも内容分析のように、言語データを後追的にカテゴリ化することもあるので、まったく異質というものでもない。

データ解析／解釈方法と 結果の解釈

◆量的研究のデータ解析

標本データから母集団に関する一般化・普遍化を目指す量的研究では、統計学的推定・検定の各種方法が多用され、方法論としてはかなり確立されたものである。統計学的推定ならば、母平均値の95%信頼区間の推定法のように、区間推定に信頼性をもたせて、結果の表示に用いる。一方、検定ならば、帰無仮説の棄却水準を5%や1%などと設定し、確率論に基づいた誤差の程度を示し、結果に対する研究者の意思決定に用いることができる。

帰無仮説が棄却された場合、その結果の解釈は極めて単純である。たとえば、無相関の検定では、帰無仮説「母相関係数が0」が棄却された場合、我々は「母相関係数は0ではない」と主張することができる。しかし、この主張はあまり強くはないので、母相関係数の信頼区間を求めて、具体的な数値の下限、上限を示すこともできる。

一方、帰無仮説が棄却されない場合には、結論は極めてあいまいな表現になってしまう。すなわち、「母相関係数は0でないとはいえない」というものである。一般に、確証的研究での検定では、重要な仮説は必ず棄却する必要がある。棄却できない場合には、その研究はほとんど意味のないものになってしまう。

一方、記述的研究や探索的研究では、量的研究であっても、それほど検定は重視されない。しかし、データの意味する点を理解し、推論し、モデルや理

論を構築し、データ全体の関係を考察するような能力が必要とされる。場合によっては、データの背後にある構造を感得するような能力も必要となる。データ探索の研究では、データは量的であっても、どちらかといえば、質的研究に通じるデータ解析の態度が要求される^{11, 16)}。ただし、このような探索的な研究は、現状の基準からすれば、エビデンスの水準として、それほど高いとは考えられない。

◆質的研究のデータ解釈

木下によれば⁴⁾、質的研究を、自然科学的認識論による質的研究と解釈的質的研究に大別できるが、そのような分類は本質ではないと指摘している。現在の質的研究、特にグラウンデッド・セオリー法は、特定の現象の理論構築がうまくできないという量的研究の限界を克服するために考案されたという経緯がある⁶⁾。多くの質的研究が存在し、ケース研究にはケース研究の解釈方法があり、ナラティブアプローチにはナラティブアプローチの解釈方法があるように、各方法に適した解釈方法が採用されている⁴⁾。しかし、論理的なデータ解釈方法としては、グラウンデッド・セオリー法で代表されるような、コード化、カテゴリ化、概念化、そして可能ならばモデル構築を行うというプロセスをとるのが、研究方法論として論理的ではないかと考えられる。重要なカテゴリや概念に関しては、理論的飽和に達するまで標本抽出を行えば、主観的な解釈もかなり客観性をもつものと考えてよいだろう。

コード化や概念化を行い、さらに理論構築を行う場合、データのなかから何が重要かを認識し、それに意味を与える能力である研究者の「理論的感受性」が重要とされている^{7, 18)}。この点は、看護研究で最も多用されている方法の一つであるKJ法の発案者である川喜田の提唱する発想法¹⁹⁾と、極めて類似した考えであるといえるだろう。

質的研究は、このデータ解釈が主観的であるとい

う批判を、量的研究者から受けやすい。このような批判が質的研究に対する無理解から発せられているという部分もあるのだが、質的研究者の説明不足もその一因であろう。このような批判に対しては、データ解釈の信憑性を高めるために、第三者や専門家の意見を聞いたり、対象者に解釈結果をフィードバックしたりするなど、反省のプロセスを研究に組み込むことが重要であろう。また、いくつかの手法を組み合わせたり、量的研究と質的研究の手法を組み合わせたりするトライアンギュレーションの方法は、一方の研究形態を相補的に補完するのに有効であり¹⁴⁾、質的研究の「質」を高めるのに考慮すべき方法ではないだろうか。いずれにしろ、データ解釈のプロセスを明示することは、質的研究の信憑性を高めるには、極めて有用である。

今後の看護研究におけるエビデンスとは

量的研究と質的研究の大きな違いは、本質的には研究目的の相違に起因するものであるが、方法論からみると、解析／解釈すべきデータが数量的か言語的かにあるといえるだろう。この結果、量的研究では統計学が用いられ、一般的・普遍的結論を得なければ、統計学が要求する標本抽出の無作為化や、無作為割り付けなどが必要となってくる。一方、質的研究では多くの場合、結果の一般化や普遍化を要求しないので、標本は任意で構わないことになる。この点から、現在の基準ではエビデンス水準は低いものと考えられてしまう。

データ解析では、量的研究が記述的でも推測的でも統計学を使用するため、現在ではコンピュータに大きく依存している。同一のデータを解析した場合、統計学的方法とコンピュータによる計算に依存している量的研究は、研究者による結論の変動は小さいものと考えてよいだろう。また、得られた結果につ

いての解釈は、統計学的検定の有意性をもとになるので、誰が行っても大差のない結論に到達する。このため、理論的な飛躍やブレイクスルーはあまり望めないが、その科学性に対して批判を受けることも少なくなる。

一方、質的研究では、コンピュータを利用することもあるが、本質的に研究者自身の頭脳がコード化、カテゴリ化、概念化などのデータ解釈を行うことになる。したがって、質的研究の結果は、研究者の資質や能力に大きく依存せざるを得ない。研究の良否は研究者自身にかかっているといえるだろう。この点をとらえて、質的研究は主観的であるとか、科学的ではないという批判が起こりやすい。さらに、モデル化や一般理論の構築では、推論の一形態ではあるが、飛躍を伴うアブダクションが必要である。しかし、理論的飽和や理論的サンプリングなどの手続きを適切に行うことで、研究の質を高くすることは可能である。

質的研究のこのようなプロセスは、主観的ではあるが、一定水準以上の能力をもつ研究者ならば、ほぼ似たような結論に達するのではないだろうか。それでも、研究方法論としての研究は、現状では十分

ではないように思われるので、今後の検討が必要な領域だと考えられる。

おわりに

—エビデンス水準の今後

量的研究のエビデンス水準に関する議論は、あったとしてもそれほど大きく異なるものではないだろう。しかし、質的研究の「質」に関しては、まだ議論の余地が大きい¹⁴⁾。質的研究の質を評価するためのクライテリアをどのようにするかは、学術誌へ質的研究が投稿された場合には大きな問題になる。SandelowskiとBarrosoは、目的、標本選択、データ解釈方法、結果、考察、妥当性などの視点から、研究論文査読のためのクライテリアを提言している²⁰⁾。

優れた質的研究は、量的研究ではほとんど考慮されない視点から新たな理論構築を行う可能性を有しているのではないだろうか。現在のEBNは、量的研究のための基準に偏しているので、看護研究での質的研究の重要性から考えた場合、今後、質的研究独自のエビデンス水準についての議論が、より広範になされる必要があるだろう。

文献

- 1) 高木廣文、西山悦子：看護系大学のEBNに関する意識調査（1）看護研究とEBNに関する意識。第62回日本公衆衛生学会総会抄録集。2003。p.195.
- 2) 小山真理子：Evidence-Based Nursing (EBN) と看護実践。EBNURSING 2001；1（1）：18-22.
- 3) 高木廣文、林邦彦：コントロールや無作為化はなぜ必要なのか。EBNURSING 2002；2（4）：102-107.
- 4) 木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い。弘文堂；2003.
- 5) Willig C：Introducing Qualitative Research in Psychology：Adventures in Theory and Method. Open University Press；2001。（上淵寿、大家まゆみ、小松孝至訳：心理学のための質的研究法入門—創造的な探求に向けて。培風館；2003.）
- 6) Glaser B, Strauss AL：The Discovery of Grounded Theory：Strategies for Qualitative Research. Adline Pub. Co；1967。（後藤隆、大江春江、水野節夫訳：データ対話型理論の発見。新曜社；1996.）
- 7) Strauss A, Corbin J：Basics of Qualitative Research-Grounded Theory Procedure and Techniques. Sage Pub. Inc；1990。（南裕子監訳：質的研究の基礎—グラウンデッド・セオリーの技法と手順。医学書院；1999.）
- 8) 林知己夫：数量化の方法。東洋経済新報社；1974。p.87-90.
- 9) Rao CR：Statistics and Truth：Putting Chance to Work. 2nd Ed. CSIR；1993。（藤越康祝、柳井晴夫、田栗正章訳：統計学とは何か—偶然を生かす。丸善；1993。p.39-47.）
- 10) Hartwig F, Dearing BE：Exploratory Data Analysis. Sage Pub. Inc；1979。（柳井晴夫、高木廣文訳：探索的デ

- 一タ解析の方法。朝倉書店；1981.)
- 11) 林知己夫：科学と常識。東洋経済新報社；1982. p.193-208.
 - 12) 柳井晴夫，高木廣文編著：多変量解析ハンドブック。現代数学社；1986.
 - 13) 柳井晴夫，岡太彬訓，繁樹算男ほか編：多変量解析実例ハンドブック。朝倉書店；2002.
 - 14) Flick U：Qualitative Forschung. Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH；1995. (小田博志，山本則子，春日常ほか訳：質的研究入門—人間科学>のための方法論。春秋社；2002.)
 - 15) 山崎敬一：社会理論としてのエスノメソドロジー。ハーベスト社；2004.
 - 16) 林知己夫：データ解析の考え方。東洋経済新報社；1977. p.3-13.
 - 17) 南風原朝和，市川伸一，下山晴彦編：心理学権研究法入門—調査・実験から実践まで。東京大学出版会；2001.
 - 18) Glaser B：Theoretical Sensitivity：Advances in the Methodology of Grounded Theory, The Sociology Press；1978.
 - 19) 川喜田二郎：発想法—創造性開発のために。中公新書，中央公論社；1967.
 - 20) Sandelowski M, Barroso J：Reading Qualitative Studies. International Journal of Qualitative Methods 2002；1 (1)：1-47.

INFORMATION

性差医療・医学研究会 第2回学術集会

日時：2005年2月19日(土)9:30～18:00,
20日(日)9:30～12:00

会場：全社協・灘尾ホール（新霞が関ビル LB階
〒100-8980 東京都千代田区霞が関3-3-2
TEL：03-3580-0988)

テーマ：高齢社会における性差医療・医学の展望
会長：大内尉義（東京大学大学院医学系研究科）
プログラム：招待講演「Gender Differences in
Sexual Functioning and Implications for
Female Sexual Dysfunction」(Lorraine
Dennerstein)

参会費：医師・教官 5,000円，コメディカル
2,000円，学生無料，その他（企業・公官庁関係
者など）5,000円

参加申込：性差医療・医学研究会ホームページ
(<http://www.pin-japan.com/gender/>) からお申
し込みください。

問い合わせ先：〒107-0052 東京都港区赤坂
6-3-18 赤坂パークプラザ2F (株) ゴールデン・
チャイルド (大坂・松田)

FAX：03-5561-9143

Email：gender2003@g-c.co.jp

日本看護研究学会 第9回 東海地方会学術集会

日時：2005年3月19日(土)9:00～17:00

会場：日本赤十字豊田看護大学（豊田市白山町七
曲12番33，TEL：0565-36-5111）

テーマ：今，求められる看護技術とは？—消えゆく
技術，遺る技術，過去から未来への洞察—

プログラム：基調講演「地域で求められる看護技
術とは—在宅療養者と家族が看護職へ期待するこ
と」(小西美智子)，シンポジウム「消えゆく看護
技術，遺る看護技術，過去から未来への洞察」，交
流セッションA「ケアと水の関係」，交流セッシ
ョンB「事例による看護技術の倫理的検討」，交流セ
ッションC「災害時に必要な看護技術」，一般演題
一般演題申込期限：2005年1月11日(火)必着
参加費：会員 3,000円，非会員 4,000円，学生
(院生除く) 1,000円

参加費振込先：郵便振込口座番号：00860-5-
57417，加入者名：日本看護研究学会東海地方会
事務局

参加申込締切：2005年2月28日(月)必着

問い合わせ先：〒471-8565 豊田市白山町七曲
12番33 日本赤十字豊田看護大学 第9回日本看
護研究学会東海地方会学術集会プランナー 市江
和子 TEL & FAX：0565-36-5259 (直通)

E-mail：kazuko@rctoyota.ac.jp